Geo-Communication

ジオ・コミュニケーション NL No.8

ジオ・コミュニケーション
ニュースレター（＝NL）No.8

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか（４）
—ラートカウの環境史熟考—

ジオ・コミュニケーションとは、ある事象に関して、「場所」についての何らかの合意があるようなコミュニケーションを意味します。

ジオの語源は、英語の geography のギリシャ語 γεωγραφία (=geographia) の接頭語であるγεω (=geo) にあり、地球、土地、土壌などを意味します。

コミュニケーションは、ラテン語の communicare を語源としますが、一つにする、まとめる、つきあう、交際する、行き来するなどの意味が含まれます。「一緒に」を意味するのがcommunisであり、フランス語のcommune（共同体）、英語の community の語源となっています。

デジタル雑誌である「ジオ・コミュニケーション」では、主に話題提供を行う「ニュースレター」（=NL）と個別の論文である「ワーキング・ペーパー」（=WP）の二種類を公刊しています。

なお、発行元は、香川大学を本拠としている「地球ディベロプメントサイエンス国際コンソーシアム」（＝ICEDS）が運営している環境史研究プロジェクトです。

香川大学ICEDS代表
村山　聡

Rocky Mountains, Colorado, USA,
October 4, 2007

連絡先：香川大学　ICEDS代表　村山　聡
住所：香川県高松市幸町１－１　香川大学
電話／Fax: 087-832-1571
Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp
URL: http://rfweb.ed.kagawa-u.ac.jp/project/wiki/muras/wiki.cgi

ヴェーバーはなぜ自然を語らなかったのか（４）—ラートカウの環境史熟考—

香川大学ICEDS代表　村山　聡

ヴェーバーは自然を語っていると主張しているのは、ヨアヒム・ラートカウである。ヴェーバーは、極めて多義に渡って、人間の内的自然への真摯な問いかけから彼の多方面にわたる著作が成立していると主張するのがラートカウの以下の著作である。

Joachim Radkau, Nature and Power. A Global History of the Environment. (Cambridge, New York et al: Cambridge University Press, 2008)

（以下、Eng. ed.と略す。）

しかし、明らかにヴェーバーは、自然環境の歴史は叙述していない。人間や社会を有機体に還元してしまうような自然主義的な社会科学に抵抗したヴェーバーは、自然と社会を峻別した上で、その相互関係としての環境史を社会関係において叙述したとラートカウは主張している。彼は、ヴェーバーを「真の自然主義者」だと述べている（Eng. ed., 19）。

『自然と権力』と題されたこの英語の著作の原書は、

Natur und Macht. Eine Weltgeschichte der Umwelt (München: C.H.Beck, 2000)

と題され、2000年にドイツ語で出版されている。このドイツ語の著作に基づいて日本語に翻訳されたのが、『自然と権力ー環境の世界史』（海老根剛・森田直子訳、みすず書房、2012年）である。この日本語訳には、ドイツ語版にも英語版にもない、第３章「水、森林、権力」の第５項目として「日本という選択肢」という書き下ろしと日本語版への序文も加えられている。

英語版にも独自に序言が加えられているが、次項で紹介するように、ラートカウはそこで明確に、彼の環境史研究とヴェーバー研究とが密接につながっていることを述べている。残念ながら日本語版では、ヴェーバーの影響が大きいことは触れられているものの（邦訳、訳者あとがき、476）、ドイツ語版に対する叙述の加筆・修正などが完全には紹介されていないため、この点が明確には読者に知らされていない。

というのも、ラートカウはドイツ語版の『自然と権力』を書き上げた後、以下の著作を2005年に仕上げている。この著作の英訳は、2009年に出版されている。

Max Weber. Die Leidenschaft des Denkens. (München: Carl Hanser Verlag, 2005)

Max Weber. A Biography. (Cambridge, UK, Malden, USA: Polity Press, 2009)

『自然と権力』の英語版の序文は2007年10月の叙述になるものであり、ヴェーバーの自伝的な著作の英語版が出される過程での序文ということになる。

ラートカウの著作は二つに大きく分かれる。一つは、諸研究の集大成のようなある意味では教科書的な叙述であり、もう一つは、特定の歴史資料に基づく本格的な専門書である。『自然と権力』と『マックス・ヴェーバー』に関して言えば、前者が教科書的構成的著作であるのに対して、後者は、ベルリンおよびミュンヘンの未公刊・公刊の大量の歴史資料に基づく本格的な歴史書である。この両者を区別した上で、ラートカウの著作は読み解いていく必要がある。

（１）ラートカウとヴェーバー

そこで、ラートカウの英語版序文に戻ろう。当該箇所は以下の通りである。英語版の加筆修正において、英語圏の重厚な環境史的蓄積を取り入れ、著作のコンセプトをより統一的なものとすると同時に、環境史の多彩さと豊かさをできるだけ明晰かつ単純に紹介するために環境史に関する学校の教科書の叙述を参考にしたと述べた後に次のように述べている（Eng. ed., xvii)。

Impulses of a very different kind came from my work on a larger study of Max Weber's highly ambivalent relationship to nature. While Weber possessed a keen appreciation for the natural foundations of history, he was a vigorous opponent of "naturalism" in the social sciences - to be precise: of speculative and poorly thought-through naturalism. Engaging the ideas of Max Weber is therefore one of the hardest exercises one can imagine for a modern environmental historian, but Weber also offers a global environmental history a wealth of impulses to which the worldwide "Max Weber industry" has paid no attention. Perhaps most importantly, wrestling with Weber made me more keenly aware than

ever before that for a historian, "nature" always means also human nature. There is a *natura prima*, which is unchangeable and shared by all humanity, and a *natura secunda*, which is subject to historical change, while never entirely breaking away from the first nature. This theoretical foundation of my environmental history, which I had initially absorbed more instinctively than consciously, along with all the consequences flowing from it, has become much clearer to me recently, in part also through the German-American conference "Turning Points in Environmental History" that I organized jointly with the German Historical Institute (Washington, D.C.) in Bielefeld in June 2005.

（以下、引用箇所は青字です。）

これはヴェーバーの読み解きに没頭したラートカウが『自然と権力』と『マックス・ヴェーバー』の二つの著作の工程から得られた結論であるが、この論点が英語版では明確化され、新たに組み込まれていたことが分かる。多くのヴェーバー研究者は、ヴェーバーは人間の本質・自然を問題にしていたことを気づいていないと指摘している。

しかし、レンドール・コリンズが指摘するように、ヴェーバーの本質を分裂症的であり、多次元的であると特徴づけること（R・コリンズ『マックス・ウェーバーを解く』、新泉社、1988年：原書1986年、17-18）はそれでも大切であり、ヴェーバーが提示した論点を常に新たな視点に読み替えていく過程において、ラートカウのような指摘が重要になる。

つまり、ヴェーバーを語れば済むわけではもちろんないが、ヴェーバーの著作に触れないことによって、現代を語る上で重要な論点を見失うとすれば、それは環境史研究において重大な損失となるであろう。

確かに、ヴェーバーは禁欲的倫理などを語る際に、人間の本質あるいは内的自然としての人間を語っている。しかしそのような、ある意味で観念主義的な議論と環境史との関連はどのように考えればいいのであろうか。

「資本主義の精神」を語る際に、ヴェーバー自身、その著作の最後に「だからと言って、一面的な『唯物論的』歴史観にかえて、これまた同じく一面的な、文化と歴史の唯心論的な因果的説明を定立するつもりなど、私にはもちろんない」（マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、大塚久雄訳、1989年、369）と述べているように観念主義的ヴェーバーは、物質主義的な歴史を否定しているわけではない。

さらにコリンズが正しく指摘しているようにヴェーバーは「一人」ではない。彼は観念主義的であると同時に極めて実践的である側面も有している。「闘争理論家」としてのヴェーバーは、「現実の権力政治、軍事闘争、集団と公的組織の難しい現世的圧力を誰よりも理解している」（コリンズ、同書、18）のである。

ラートカウは、環境（ドイツ語でのUmwelt）概念の創始者であるヤーコプ・フォン・ユクスキュル（1864-1944）を紹介して、ユクスキュルは、「ハード」な生態系理論とは正反対に、個々の生物がそれぞれ固有の理性を持つという点に大きな価値を置いていた」という（ラートカウ、邦訳、49）。今日の生態学は、このような環境概念とは別種のものである。ラートカウは歴史的環境研究においては、この概念は重要であり、たとえば、文献資料を正しく理解するには、林務官の目に映る森林が、農民や牧人そして休息をもとめる都市生活者の目に映る森林とは異なっていることを、思い起こすことが重要であると指摘している（同所）。さらに続けて、ここから次のような結論を導くことができる。すなわち、そこで暮らすできるだけ多くの人々が心地良く感じられるような仕方で、個々の文化的小宇宙にそれぞれの生態的地位を認めることが一番良いことなのである（同所）。この邦訳はおそらく正しくドイツ語から訳されているとは思うが、下記の英語訳の文章と比較した時にそのニュアンスの違いは明らかなのではないだろうか。

... One could conclude from this that it would be best to leave each cultural microcosm its ecological niche, in such a way that the greatest possible number of those living there feel comfortable in it. (Eng. ed., 27)

「生態的地位」は、ecological nicheであり、生態的位置であろうし、それぞれ個人のcultural microcosmに生態的位置を残すことが大切であり、そのことによって、できるだけ多くの人々がそこに心地良さを感じることができる

ようにすることがベストであると述べている。

さらに邦訳では、「『良い』環境とは、数多くの小世界を可能にする環境である。それら小世界は、心理学的な構成単位であると同時に生態学的な構成単位でもある。『環境学とは、外部へと移された心の探究[心理学]の一種である』とユクスキュルは書いている。環境史はまた、心性史でもあるのだ（同所）とあるが、ここも英文とのニュアンスの差異が見いだせる。また、下記に下線を引いたように重要な追加の一文もある。

... That environment is "good" that makes possible many small worlds, worlds that are as much psychological as ecological entities. "Environmental science [Umweltlehre] is a kind of externalized psychology [Seelenkunde]," Uexküll wrote. Environmental history is also a history of mentalities - the mentalities that become humanity's second nature. (Eng. ed., 27

心性が人間の第二の自然であるという一文は邦訳にはない。また、「構成単位」と訳されている英語はentityであり、心理的な実体、生態的な実体であり、それも複数の実体の存在を問題にしていることが分かる。

英語版では、ヴェーバーに関する考察から得られた知見が随所に挿入されており、独語原書あるいは邦訳では曖昧な意味連関が明確化されている箇所が多々ある。極めて優れた邦訳ではあるが、残念ながら邦訳だけでは、ラートカウの到達点を知ることはできない。しかし他方で、ドイツ語版、英語版そして邦訳を比較することによって、20世紀末からの10年間という短い期間にも関わらず環境史研究が包摂する視野の広さと深さと難しさを体験することができると同時に、ラートカウが再度ヴェーバーを経由した到達点を明確に知ることができる。「人間中心的な環境史に対して非人間中心的な環境史」を対置できるほど簡単ではなく（邦訳、19-20）、自然はそれ自体として存在するのではなく、歴史的現象としてのみ存在するのだということが明らかになった瞬間に歴史家にとって、環境史の認識プロセスが始まったのである（邦訳、47-48を参照）。

（2）ラートカウの課題

おそろしくつまらない第３章「水、森林、権力」の第５項「日本という選択肢」（邦訳、164-179）は、次を読むことをためらわせるほどである。英語圏、ドイツ語圏に対して、日本の環境史研究の成果を的確に紹介していないことが最大の原因でもあるが、世界各国・各地域の環境史研究の成果をまとめていくようなこの著作の場合の限界を示してもいる。豊富かつ精確な知識に基づく叙述とそうではない叙述との差が大きい。林学に関する多くの箇所で示唆に富む記述が見られるのに残念である。

しかし、ラートカウは概説書の限界を知りつつも、あまりにお互いのことを知らない環境史研究者ならびに一般読者に注意喚起を促すためにも、無数の環境史研究に一定の構造を与えることにより、統一的な叙述を目指すようなまとめが必要だと考えたのである（邦訳、14）。

彼が選んだ構造は、１）環境問題の影響の地理的な広がり、２）環境問題と取り組む社会的権威、そして３）その取り組みにあたって用いられる知のタイプであった（邦訳、62）。

（3）意識と新たな「政府」

過去数十年間の環境に関する歴史研究がもたらした最新の洞察は、きわめて単純化した言い方をすれば、一見正反対に思える二つの方向に進んできた。一方の流れは、人類の環境問題の起源を、ますます遠く、はるか先史時代にまで遡らせている。しかし、他方の流れは、環境問題の持つ現代のグローバルな広がりは、その重大性の点でかなり最近のものであり、ほとんど1950年代、60年代以前には遡らないと主張している。実際、この主張によれば、一言うも恐ろしいことだが一、環境問題のそうした広がりは「エコロジーの時代」と言われる時期にその頂点に達したのである。（邦訳、432）

環境保護論者たちを苛立たせることに余念がない歴史家は、彼らが懸念する恐ろしい事態はいずれも新しいものではないと述べることで、環境に対する行き過ぎた懸念に反論することをつねに好んできた。すでに数千年前に人々は

木々を伐採し、動物を殺し、河川を汚染していたのであり、古代にもすでに火は煙を生み出していたのだ、というわけである。ジョン・R・マクニールは、正当にも、『日のもとに新しきものあり』と題された「20世紀世界の環境史」（邦訳『20世紀環境史』）において、このことは半分の、いや、実際にはおそらく半分以下の真実にすぎないと指摘した。というのも、人間の手による環境変化が過去50年間にまったく新しい規模を呈するにいたったという事実を見落とすことは、今日では不可能だからである。

とはいえ、私たちは少し慎重になるべきだろう。すでに20世紀半ば以前にも、多くの批判的同時代人が、ほとんど同じことを認めうると信じていたのだ。たとえば、ルートヴィヒ・クラーゲスと、彼が1913年に『人間と大地』で発したメッセージを考えてみるとよい。そして、いまから100年後に生きる人々にとって、私たちの時代さえもが「古き良き時代」ーいまだ生物の大きな多様性とたくさんの無傷の自然があった時代ーとなる可能性を排除することはできないのだ。実を言えば、私たちにはまだ失いうるものがたくさんある。私たちは、環境についてのあらゆる悲観主義にもかかわらず、このことを決して忘れるできではない。それはともかく、今日の私たちの観点からすれば、グローバルな環境史の重大な転換点ーひょっとすると最も重大な転換点そのものーは、過去50年間に生じたのである。（邦訳、433-434）

さらに、人間と環境との関係を効果的な仕方でグローバルにコントロールできる見込みは存在せず、政治とその諸制度も、環境問題の複雑さと変わりやすさにきわめて限定的にしか対応できていない。そうである以上、人類は未来においても、これまでの歴史でつねにそうであったように、本質的に自然の自己治癒力に頼らざるをえないであろう。（邦訳、420）

しかし他方で、ラートカウは新たな「政府」が必要であると主張している。第６章「グローバル化の迷宮のなかで」で、ネパールとブータンを紹介した後の「環境政策における権力と不確実性の諸問題」の項目において、再生可能エネルギーにおける太陽エネルギー技術の発展がなぜ緩慢なのかという議論において、原子力エネルギーを実用化するためには、少数のエリートを説得しさえすればよかったのだが、太陽エネルギーの場合には、厖大な数の末端の消費者が協力せねばならないであると指摘するクラウス・トウラベを紹介しているが（邦訳、415）、英語版で次のような一文がその後に追加されている。

A successful environmental policy therefore requires new kinds of government.（Eng. ed., 298）

ラートカウが、企業などでも使う統治というgovernanceを使わずに、governmentと表現していることに注目する必要がある。訳者は、「訳者あとがき」で「英語版における改訂を反映することができた」（邦訳、479）と述べているがすでに記してきたようにすべての箇所が反映されているわけではない。完全に反映していると思われるのは終章である。

また、実に巧みなこなれた訳で読みやすいのであるが、石井寛氏の『林業経済』65(8)における書評でも指摘されているように、ドイツ語のForstgeschichte、英語のthe history of the forestが「営林史」と訳されているのは特に違和感があるが、それ以上にミスリーディングとなるのは、governmentをガバナンスと訳しているところと、英語版でのsubsistenceが自給自足と訳されているところも問題である。

まず、政府」に関してであるが、終章「政治的議論における環境史の役割」の「環境機構なき『ガバナンス』（邦訳、429）という項目は英語版では以下の通りである。

“Government” without bureaucratic apparatus. (Eng. ed., 309)

真に効果的な世界規模の環境管理は、巨大かつグローバルな官僚制の形をとりえない。むしろひとは、そうした環境管理を、制度の経済という意味での「ガバナンス」としてイメージするべきである。（邦訳、429）

この箇所の英文は以下の通りである。

A worldwide environmental government that is truly effective cannot assume the form of a gigantic global bureaucracy. Rather, one should imagine it more like a “government” in the sense of the institutional economy: as a group of the simplest possible rules whose rationale every

intelligent person in the world can understand. (Eng. ed., 309)

この文章の後、核戦争の可能性が喧伝されたにもかかわらず、冷戦時代に世界最終戦争は結局、幸運にも起こらなかったのは、単に核の抑止力が効いたからのなのかという問いかけの後に、邦訳では、私たちはここから、少なくとも人類の生存という問題に明らかに関わる事柄をめぐっては、グローバルな環境ガバナンスにとって、確かに成功の見込みが存在すると結論することができる（邦訳、430）と述べている。この部分は英文では以下のように表現されている。

We can conclude from this that the chance for a global environmental government does exist, at least on issues that clearly touch on questions of human survival. (Eng. ed., 309)

ドイツ語版との異同はあるかもしれないが、英語版では、明らかに新たな「政府」を提案していることが分かる。官僚的ではない、この新たな政府については、さらに詳細はつめられていない。ただ、もう一点ここで注意する必要があるのは、「制度の経済」という訳であるが、これは制度学派の経済学の研究蓄積を反映しているのであり、ソーシャルキャピタル論などとも関係する社会制度の合理性の問題を指摘していることである。この新たな政府の基盤に関してラートカウは次のように述べている。

多くの環境分析の複雑さにもかかわらず、私たちは次のことを決して忘れるべきではない。すなわち、環境保護は、その最も根本的なレベルでは、まったく単純にすべての人間の基本的な欲求、つまり、清浄な空気と良質な水への欲求から生じるものなのである。これらの欲求が首尾一貫した仕方で実際に満たされるならば、他の多くの環境問題も同時に解決されるだろう。環境史は、個人の感覚的な知覚と同様に、これらの欲求がいかに強力であるかを示している。悪い空気を長い間吸ってきた後で清浄な空気を呼吸するとき、また、汚い水を飲まねばならなかった後で清潔で新鮮な水を口に含むとき、ひとは大きな喜びを感じる。地球上のすべての人間は、こうした経験を共有しているのであり、その経験は、おそらくグローバルなスケールにおける環境倫理にとって、最善の基盤となるであろう。それはすなわち、国家なきガバナンスの基盤なのである。（邦訳、431）

最後の下線を引いた一文は英語では、a government without a state (Eng. ed., 310)である。ここではやはり「国家なき政府」の基盤がありうることが示唆されている。

（4）”subsistence economy”

環境史は、これまでのところ、多彩なテーマの詰め合わせのような観を呈しているのだが、その内的統一を最終的に保証するのは、外的自然と人間の内なる自然とのあいだの密接な結びつきの存在であり、また、人間がつねにそれを感じてきたということである。＊＊＊「環境意識」とは、その核心において、かなりの部分まで健康意識であり、そのようなものとして何千年もの歴史を持っている。（邦訳、22）

上記で「＊＊＊」を付しているのは英語版では次のような文章が挿入されているからである。

It is strange that “nature in man” was more of an everyday theme a hundred, two hundred years ago than it is today, in the supposedly “ecological age.” Environmental history should remember this old theme. It will become history on a grand scale only if it succeeds in grasping the “nature in humanity” in its historical changes, as well as in its biological and suprahistorical elements.

ドイツ語版発表後、ヴェーバー研究に没頭していたと考えられるラートカウは、環境史研究における人間の内的自然に関する考察の必要性をより自覚的に述べるようになったのである。

ハイキングやサイクリングや水泳を通して、私たちは自然との感情的な結びつきを更新し、より健やかになるだけでなく、環境史についても驚くべき発見をすることさえある。人間と環境との関係では、多くの事柄が言葉で明確に言い表されてはいないということ、つまり、ひとはそうした関係を書物のなかよりもハイキングの途上でより良く発見するのだということを、環境史家は決して忘れてはならない。（邦訳、456）

ドイツの環境政策の重苦しい行き着く先は、「我々が何よりも必要としているのは、新しい法律でも、新しい対策でも、新しい研究でもない。我々が最も緊急に必

要としているのは、新しい意識なのである」。ここで言わんとされているのは、私たちは自然の一部であり、そうしたものとして感じて行動すべきであるという意識であり、私たちは自然を尊重し、自然と和解し、自然との友愛的調和のもとで暮らすのだという意識である。発言者がみずからの見解をこのように結論づけるなら、つねに賞賛の拍手が期待できる。しかし、私たちはそうした英知の言葉をどのように考えるべきなのだろうか。（邦訳、453）

先に引用した次の文章にはさらに続きがある。

Environmental history is also a history of mentalities - the mentalities that become humanity's second nature.

In this regard, environmental history can be grounded in a philosophy of the ecological niche: the niche created by nature, but also the niche created by humans. It is ecological niches that ensure the diversity of nature, but also of human culture and of happiness. This is the foundation of the nature philosophies of the garden, the hedge, the dry stonewall. There is good reason why the human love of nature often found its highest bliss in gardening. (Eng. ed., 27)

この箇所の邦訳は以下のようにかなり異なった印象を与える。英文ではかなり書き換えられているし、nicheという表現で、小さな生命の居場所を英語ではうまく表現できている。

・・・環境史はまた、心性史でもあるのだ。

したがって、環境史は、生態的小環境 [生態的地位] の哲学のうえにみずからを基礎づけることができる。それは自然によって形成された小環境の哲学であるだけでなく、人間によって築かれた小環境の哲学でもある。自然の多様性のみならず、人間の諸文化と幸福の多様性をも保証するのは、複数の生態的小環境なのだ。人間の自然への愛がしばしば造園にその最高の幸福を見出したのには、十分な理由があったのである。（邦訳、49-50）

無数のecological nichesは、無数の異なった時間を有していることに注目する必要がある。「長期持続」に注目したブローデルの時間の三層構造は大きな修正が必要となるのである。さらに、自給自足というsufficiencyではなく、すべての生命体の存在、subsistenceの経済が問題にされる。つまり、「生存」経済は、自給自足経済と訳すことはできないのである。

そこで最後に議論が必要なのは、ラートカウが終章で以下のように述べた点である。

ひょっとしたら私たちは、再度マックス・ヴェーバーから学ぶことができるかもしれない。ヴェーバーは、その有名な論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904-1905年）において、世界史の新たな支配勢力が、いかにして経済的な動機とスピリチュアルな動機の複合的作用を通して興隆してきたのかを描き出した。この二つの動機は、その起源も種類も異なるが、相互に補強し合ったのだった。この二つの動機のどちらか一方だけでは、世界史を作り出すのに十分ではない。重要なのは、これらの異質な諸動機の相乗効果なのである。この過程において、スピリチュアルな動機は、その神学的実質を通してというよりも、それが確立する日常的な生活様式を通して効果を発揮する。まったく逆説的なことに、資本主義と結合したこの厳格な宗教性の結果が、世界の世俗化 [脱宗教化] なのであった。

このモデル―ヴェーバーはそれを経験的な現実の正確な反映ではなく理念型とみなしていた―を環境運動にも適用してみる価値はある。・・・（邦訳、459）

生態学的な運動としての環境運動が応用生態学以上のものでありうるのは、あらゆる生命体の「生存」に関わる新たな種類の政治や政府の登場を期待する人間の内的自然つまり「すべての人間の基本的欲求」のなせる技なのであろうか。

ラートカウはドイツ語版でも英語版のいずれにおいても、しばしば述べている事柄がある。それは歴史研究における史料批判の重要性であるが、それは史料の正当性や妥当性という一般論を越えて、環境史特有の論点があることを紹介している。

・・・環境史のひとつの困難は、人間と自然との関係では、多くが語られぬままにとどまるということである。「自然」についての語りは、いつでも自然そのものと大いに関係しているとは限らないのである。（邦訳、457）つまり、「自然」の多くの生命そして

物自体はほとんど何も語らないからである。

環境史自体は、主として言説の歴史として私たちの前に立ち現れる。だが、それにもかかわらず、私たちは言葉を真に受けすぎるべきではない。環境史家は、つねに史料の行間を読むように努めねばならないのだ。（邦訳、456）

「史料の行間を読め」ということはよく言われる。しかし、これまでの議論を踏まえると、三つの史料学的課題を克服する必要があることが分かる。

１）もし、ecological nicheを問題にするならば、環境史研究が視野に置く視界は際限もなく広がる。それと同時に、ラートカウが引用する多彩な文献においてもその議論の是非を判断することができないほどに無限に広がり、自分の知らない世界に圧倒されることになる。ラートカウ自身も次のように述べている。

グローバルな環境史に、より長い期間にわたって、より集中的に没頭すればするほど、ひとは私たちの世界の諸現象の限りなさを実感するようになる。（邦訳、454）

２）そのような無限の広がりは、環境史研究におけるスタンダードな教科書はすぐさま乗り越えられるべき対象になるほどに、脆弱性があることを示す。と同時に、感性と体感の重視を環境史は忘れてはならないと、ラートカウと共に宣言するならば、終わりのないコミュニケーションを余儀なくされることになる。その覚悟の上で、あらゆる場面で、現場重視でジオ・コミュニケーションを実践し続ける必要がある。これは、旧来の研究機関等における知の拠点という発想を取り払うことにつながるかもしれない。

３）とはいえ、歴史研究として、書斎にこもる必要性とその役割はないのか。ラートカウの最後の言葉は、新たな種類の政治こそ、今日の環境保護が緊急に必要としている（邦訳、461）である。前項で、「国家なき政府」の必要性と呼んでいた事柄であるが、グローバルな環境史は、地域的特殊性に対する私たちの意識を同時に研ぎすますべくグローバルな展望を利用するが、環境保護論を世俗的な世界宗教に変えるのにささやかな貢献をなしうるかもしれない（邦訳、46-461）とも述べている。

現在の環境問題から過去を見た時に、その類似性のなかで過去と現在を比較するのではなく、過去に新たな発見と示唆を得る方法が必要なのである。ここで、アマルティア・センの提示した概念である”informational base”に注目するとよい。価値判断の基準に何を置くかという情報である。

Amartya Sen, Development as Freedom. (New York: Alfred A. Knopf, 2000), 54-60.

たとえば、あくまでも多様な生物体のnicheを尊重する立場を貫くこと、あるいは、実感としての環境意識を大切にすることなど、これらは、単なる情報ではない。しばしば、ラートカウがヴェーバーを引き合いに出し、理念型を語るのもこの種の議論に由来しているのではないであろうか。

環境保護論を世俗的な世界宗教に変えていく方向性において、グローバル環境史が寄与できるというラートカウの主張は、他方で、環境運動がある程度まで地域に根ざしていることを前提としている。

ここで歴史研究において欠くことのできない史料論において、ラートカウの「行間を読む」という姿勢から一歩先に進める必要があるように思う。独書原書の序言において、ラートカウは、草稿について容赦なく細部にわたって反論を加えたフランク・ユケッターに感謝して、しっかりと基礎づけられた環境史の主要な手がかりのひとつは、諸制度と諸組織のうちにこそ見出される（邦訳、14-15）という、当初受け入れることが難しかった認識は彼から得たものであると述べている。

つまり、「史料の行間」を読むこととは、その史料の存在そのものが諸制度と諸組織の帰結であることを歴史的に分析する必要があることだと私は考える。史料を読み解くだけでなく、その史料が成立する背景を分析する必要がある。この双方向からの史料分析を私は「比較史料学」（= Holistic Approach to Historical Sources）と呼んでいる。